

令和4年度 体育科経営について

1 本校体育科のねらい

- すべての子どもが「できる」楽しさや喜びを味わうことができるように、協働的な学習の中で、技能を高めることができるようにする。
- 仲間とのかかわり合いながら運動に取り組む中で、自己の課題を見付け、解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができるようにする。
- 生涯にわたって運動に親しむために、運動の楽しさや喜びを見いだし、自ら運動にかかわろうとする資質や能力を高めることができるようにする。

2 目指す子ども像

小学校学習指導要領解説（平成29年告示）体育編において、保健体育の見方・考え方として、豊かなスポーツライフの実現のため、運動やスポーツに対して、「する・見る・支える・知る」といった多様な関わり方と関連付けることとある。

スポーツの歴史を見ていくと、ルールや道具、コートなどを「皆が楽しめるように」工夫していくことで、能力や体格差、性別などを越えて、誰もが気軽に参加できる競技性が向上していったことがわかる。また、新たな戦術や技術が生み出され、プレーの質が向上したことにより、観客を熱狂させるゲームが増えていった。そのようにして、競技性やプレーの質を向上させていくことで、スポーツの文化は発展し、現在の多様なスポーツの形をつくり上げてきた。

学校体育においても、子どもが、皆が楽しめるようにルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた運動を選んだりすることで、それぞれの運動文化が作り上げられる。個人の運動へのかかわりは数多くある中で、互いを認め合い、かかわり合う姿こそ、多様性を認め合う社会で、体育科が担う役割の一つであると考ええる。

そこで、本校体育部では、「かかわり合う子ども」を育むことを目指す。子どもがかかわり合いながら運動に取り組むことで、技能差や運動経験に違いのある仲間が、自他の違いを認め合い、補い合いながら問題を解決することができる考える。かかわり合う経験を積み重ねていく中で、達成する喜びを共有し、互いを認め合い、多様性を受け入れる人間性が育まれていくと考える。

以上のことから、本校体育部が目指す子ども像を次のように設定する。

かかわり合う子どもの育成

3 学習過程

「つくる学習」の単元構成は、図1のようになる。単元初めに、課題を設定するために、試しの活動を行い、「動き」と「かかわり」の二つの視点で課題を共有する。その課題を基に、動きの習得過程や活用過程をつくりながら、学習を進めていく。

また、振り返りを教師や友達と共有するためにICTを活用し、学びを蓄積することで、動きの習得過程や活用過程に生かしていけるようにする。

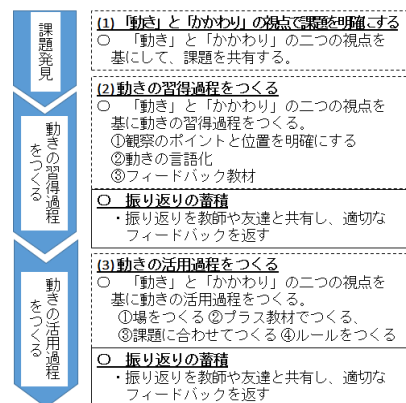


図1 「つくる学習」の単元構成

4 方策

「つくる学習」について

「つくる学習」とは、子どもが動きの習得過程や活用過程を協働する中でつくることで、かかわり合いを生み出す学習である。「つくる学習」を展開することで、子どもが他者と喜びを共有したり、認め合ったりする経験を積むことを通して、豊かな人間性を育むことができると思う。

(1) 動きの習得過程をつくる。

動きを習得する過程の中で、子どもが互いの動きを見て、運動のポイントを見付け、アドバイスし合ったり、補助し合ったりしながら、習得方法を協働してつくる。

- ① 観察のポイントを明確にし、効果的なかかわりができるようにする。(表1)
- ② 動きのこつを伝え合うことで、かかわり合いながら、体感覚を意識して動くことができるようにする。(写真1)
- ③ フィードバック教材を開発し、動きの出来映えを視覚化し、かかわり合いを通して技能を高めることができるようにする。

表1 観察のポイントと位置の例

動き・運動	ポイント	位置
走り幅跳び	空中姿勢(足の裏が見えるか)	正面
開脚後転	足を開くタイミングはどこか	真横
ゲーム	攻めがサイドを効果的に使っているか	上か後ろ
バスケット	パスをもらえる位置に動いているか	後ろ



写真1 声を掛け合う子ども

(2) 動きの活用過程をつくる。

身に付けた動きを活用する過程で、子どもがルールをつくりかえたり、場や運動を工夫してつくったりすることで、かかわり合いを生み出す。

- ① 組み合わせて場をつくる。
- ② プラス教材(教師が提示する教材)を使って、新たな動きや遊びを引き出す。
- ③ 自己の課題に合わせた場をつくり、課題ごとに動きを高める。
- ④ 皆が楽しめるように、ルールをつくりかえる。